

皮心伝心

AIのある世界 ――人生は旅程のない道――

皆さんはこれまでの人生を、予定通りに歩んでこられたでしょうか。もしくは予想通りの道のりだったでしょうか。現在ある自分の姿は、思い描いていた理想の自分の映像となっているでしょうか。おそらく多くの方にとっては、予定通りでも予想通りでもない道であったのでは…。

さて、昨今AI (artificial intelligence：人工知能) の話題をあちこちで耳にするようになり、テレビや雑誌でも特集が組まれている。それらを見ていると、われわれの進むべき道も過去のさまざまな情報を入力することで割り出せるのだとか…驚くべき時代となってきた。身近なところでは、教育の現場で成績の管理がすべてコンピューターでなされ、本人や教師が気づかない弱点やそれを克服するような練習問題が提示され、レベルアップを図れるシステムが学校によっては始まっている。そういえばスポーツの世界でも、すでにデータ解析が重要な役割を成している。根性だけでは解決しないことが科学的に解決できるようになってきた。私が学生のころにこのようなツールがあれば、苦勞もしなかったのではないかと、もう少し遅く生まれたかったと思う気持ちもないではない。

最近、知人からある経済雑誌の特集の記事をいただいた。「若手医師が拓く未来――AI、ロボットに負けない医師になる――」という特集で、その中のある記事に目が釘づけになった。そこには「2050年に衰退しそうな診療科・職種・検査・処置・治療」が記載され、病理科、放射線科とともに皮膚科の文字があったからだ。とくに画像診断、写真診断の部分が置き換わっていくということのようだった。確かにメラノーマの診断にはすでにコンピューター解析が使われている。一方で、栄えていそうな診療科の条件には、個別性が高くパターン化できない(小児科など)、機械やメディカルスタッフに任せられない(外科など)、治療を途中で中断する患者が多くその対応が必要である(糖尿病内科など)、社会的使命が大きい(救急科、産婦人科など)、などがあがっていた。

今後、診療科が生き残りをかけて目指すところとしては、専門性を突き詰めるか、共感力を高めるかとされていた。とくに衰退を予測された皮膚科では真剣に考えなくてはならない。共感力の高い医師というところではコミュニケーション能力がますます重要となる。かといって、すべてがAIやロボットで代替できとは思わない。べたな言葉だが“真心”を尽くし、患者が求めているものを察知して、いわゆる癒すことができるのは人間だと思っている。また、そうあってほしい。

将来AIやロボットがある世界は当たり前になると想像するが(もちろん私は当たり前になる時代までは生きていないが)、補助をしてもらいつつも、“真心”をもって診療にあたることのできる医師でありたい。そして、旅程のない道を続けたい。

石黒 直子

(東京女子医科大学皮膚科学講座教授・講座主任)